

## 第5回 新たな「札幌市教育振興基本計画」検討会議 議事録

日 時：平成25年8月27日（火）9時30分～12時

場 所：札幌市教育委員会4階 教育委員会会議室

出席委員：大久保会長、梶井副会長、室橋委員、長沼委員、河野委員、飯田委員、竹谷委員、稲邊委員、林委員、星野委員、丸谷委員、三宅委員、秋山委員、塚野委員、富田委員、永根委員

欠席委員：なし

事務局：梅津生涯学習部長、平井企画調整担当課長、田中生涯学習推進課長、齊藤指導担当課長、春田教育相談担当課長、松田幼児教育センター担当課長、小松中央図書館管理課長、千葉中央図書館調整担当課長、信太調査企画担当係長、札幌調整担当係長、近藤生涯学習係長、山谷社会教育担当係長、泉栄養指導担当係長、塩越学びの支援係長、工藤指導担当係長、田中特別支援教育指導担当係長、松岡調査企画担当係員、大津調整担当係員

### 1 開 会

### 2 議 題

#### (1) 札幌市教育が目指す人間像

資料1について、事務局から説明を行った。

#### <大久保会長>

ただいま「札幌市教育が目指す人間像」の修正案について事務局から説明があったが、これについて御意見いかがか。

#### <飯田委員>

事前に資料1を確認したが、非常に素晴らしくまとまったと思う。文面もまとまっているし、すんなりと心に入ってくるように感じるので、私はこの修正案で良いのではないかと考えている。

#### <塚野委員>

飯田委員と同じく、基本的には事務局の修正案が良いと思う。ただ、固執するものではないが、「ふるさと札幌を心にもち、国際的な視野で学び続ける」という部分の「国際的な視野で」というところについて、「国際的な視野ももって」というような文言にしてもいいのではないか。国際的な視野で考えることは大事だが、他の様々な事も考えて学び続けるということも大事だと思う。

#### <大久保会長>

他いかがか。他に御意見がなければ「札幌市教育が目指す人間像」については、資料1の事務局修正案のとおりとしてよろしいか。

#### <事務局（調整担当係長）>

ありがとうございます。これに関連して、これまでの議論の中で、「札幌市教育の目指す人間像」の七つの要素が、今後どういった形で5年間のアクションプランに落とし込まれていくのかを整理してほしいという御意見があった。これについて、次回の検討会議でお示ししたいと考えているが、少し

触れさせていただく。

一つ目の「未来に向かって創造的に考え、主体的に行動する人」については、第3回の検討会議で学校教育における「学ぶ力」の観点において、基礎的な力については、活用する力や意欲に課題がみられるというお話をさせていただいた。この課題を解決するために、物事を考えていく力、探究していく力が必要ではないかと考えている。これらの力を養うためのきっかけとして、中心となってくる施策が資料3の1-1-3「進路探究学習」、1-3-4「科学的リテラシーを育む学びの充実」であり、力を入れていきたいと考えている。

「進路探究学習」については、自己肯定感とも関係しており、具体的には、職業体験等を通して、社会のことを知る、実際に今やっている勉強がどういった形で将来に関連してくるのかということが分かる。こういった切り口で考えていきたいというのが一つ。

もう一つの「科学的リテラシーを育む学びの充実」については、単純に教科として理科教育をやっていきたいということではなく、仮説を立てて、観察や実験を行い、その結果から考察するといった物事の考え方を育むということ。このような考え方は他の教科にも当てはまる部分だと思う。

人間像の二つ目の「心豊かで自他を尊重し、共に高め合い、支え合う人」については、「共生」という意味合いがあり、「命を大切にする指導」など道徳的なことが中心となってくる。施策としては、1-2-1「命を大切にする指導の充実」、1-2-2「豊かな人間性や社会性を育む学びの充実」を重点的に取り組んでいくというような形になるかと思う。一方で、いじめ・不登校の対策についても現在力を入れている。2-5-1「子どもが安心して学べる支援体制の充実」、2-5-2「学びに困難を抱える子どもへの対応の充実」といった「学びのセーフティネット」として、各種の相談支援体制の充実に力を入れていきたいと考えている。

人間像の三つ目の「ふるさと札幌を心にもち、国際的な視野で学び続ける人」については、グローバルな考え方ということになる。この部分については、1-3-1「札幌らしさを実感する学びの充実」として、札幌らしい特色ある学校教育である「雪」・「環境」・「読書」が中心となる。また、「国際的な視野」に関しては、前回会議で様々なアイデアをいただいたが、現実的な部分では、1-3-2「国際性を育む学びの充実」として、ALTの配置を充実させていくといった部分が中心となると思う。

以上、これらの観点を、力を入れていく項目として、次回の検討会議でお示しできるように準備を進めているところ。

#### <大久保会長>

全国学力・学習状況調査の結果はいつ頃発表されるのか。

#### <事務局（指導担当課長）>

文部科学省から報道機関に対して、本日27日午後発表されることとなっている。

#### <大久保会長>

札幌市の子どもたちは、基礎的な力に比べて、活用する力や意欲といった部分に課題があるとのお話があったが、その傾向が今回の学力・学習状況調査でどういった形になって現れるかということも一つのテーマだと思う。

事務局から説明いただいたことに関して御質問や御意見いかがか。

#### <室橋委員>

人間像の説明文の文言について、「自他」という言葉は、「自分」と「他人」を省略した言葉である。こういった重要な文言は省略していない形の方が良いのではないか。

<事務局（調整担当係長）>

いただいた意見を参考に、最終的には教育委員会会議で検討させていただく。

<大久保会長>

他いかがか。

<事務局（指導担当課長）>

先ほどの全国学力・学習状況調査の結果について、明日 28 日の公表であったため、訂正させていただく。

<大久保会長>

札幌市からの公表か。

<事務局（指導担当課長）>

文部科学省から、調査を実施した学校に対してである。

<稲邊委員>

前回会議の際に、事務局から「子ども教育委員会会議」を開催するとの話があり、新聞記事にも載っていた。具体的に子どもたちがどういうことを考えているのか、どういうことに関心があるのか非常に興味がある。どんな意見が出ていたのか教えていただきたい。

<事務局（調整担当係長）>

子ども教育委員会会議では、「学習について」、「いじめ・不登校について」の二つのテーマを設定し、意見交換を行った。札幌市の教育委員も子どもたちの輪の中に入ったが、発言するいとまも与えないほど子どもたちが積極的に発言していた。

<事務局（企画調整担当課長）>

主な意見として、「学習」については、「授業内容が分からない生徒に対して習熟度別の対応をして欲しい。」「進路探究学習に関する職業体験を多くして欲しい。」といった意見があった。また、「いじめ・不登校」については、命を大切にする指導に関して、「道徳の時間などを使い、いじめの問題についてクラス全体で話す機会があれば良い。」といった意見があった。

<事務局（指導担当課長）>

「学習」に関して、子どもたちの中からは体力についても、「自分の学校では現在体力テストを行っているが、今後も続けて欲しい。」という意見があった。また、「雪」・「環境」・「読書」といった札幌らしい特色ある学校教育の部分についても、雪という活動の中で、「授業でスキー学習はあるが、雪像作りやかまくら作りといった活動もやってみたい。」という意見があった。実際にやっている子どもから、『雪あかり村』という取組で、アイスキャンドルを作る活動がある。」という話が出たこともあり、事務局としては、学校・校種を超えた交流ができたのではないかと思っている。

<稲邊委員>

子どもたちの意見は計画に反映されるのか。

<事務局（調整担当係長）>

表現として計画書に落とし込むことができるかどうかは別として、学校生活の身近な部分についての意見が聞けたことから、具体策としては非常に参考になった部分があり、それを踏まえて検討していきたい。

<稲邊委員>

会議で出た意見などについて、それぞれの学校に報告はするのか。

<事務局（調査企画担当係長）>

ただいま報告書を作成しているところ。報告書ができ次第、参加した子どもたちとその学校に対してお届けする予定。

<稲邊委員>

実際に子どもたちがどのようなことに関心があるのかということ、情報として現場まで通達するというのは大切なことだと思う。よろしくお願ひしたい。

<事務局（調査企画担当係長）>

いただいた意見を参考にさせていただく。

<大久保会長>

他いかがか。

<永根委員>

1-6「学びの場の連携の推進」には、「幼保小連携なかよしキャンプの推進」という施策があり、小学校5年生と年長児が対象となっている。特別支援学校にも小学校5年生がいるため、この対象には障がいのある子どもたちも含めて考えて良いのかお伺ひしたい。

幼稚園・小学校・中学校・高等学校と並列して書く際に特別支援学校も併記していただければ、障がいのある子もいない子も一緒に学べるというスタンスができてくると思う。

<事務局（生涯学習推進課長）>

野外教育事業の中で林間学校を行っており、その中では特別支援も含めた取組を行っているところである。なかよしキャンプについては、平成23年度からモデル事業として行っており、今年度は、これまでの2校から4校へと実施校の幅を広げている。来年度以降も幼保小連携という形で事業を充実していきたい。これまでの成果や今年度の事業を検証する中で、子どもたちにとってどういった広がりを持たせることが良いかなども配慮しながら、事業の拡充を考えているところであり、ただいまの御意見も踏まえて検討させていただきたい。

<星野委員>

先ほど、活用する力に関する話の中で、「科学的リテラシー」というのが一つのキーワードになるというお話だった。仮説を立てて検証していくこと、その考え方自体を育むのが重要であり、理科の教科のみを強調するわけではないというような説明があったが、アクションプランの素案を見る限りでは、理科の教科の色合いが強い内容になっているため、仮説を立てて検証するという考え方自体が重

要だということを是非強調して入れていただければ、一目見た時でも誤った理解をせずに済むのではないかと思う。

#### <大久保会長>

ただいまの御意見は、考え方自体を育てたいという表現が必要であるということかと思う。

#### <星野委員>

そういった部分を強調していただきたい。子どもたちがよく「何のために勉強するのか」と言うが、恐らく「仮説を立てて検証していく」という考え方が、仕事をするときに一番役立つ考え方だと思う。そういったことを、先生方や教育に関わる人が計画を見た時に子どもに伝えやすくするためにも、強調していただきたい。

#### <大久保会長>

他いかがか。

#### <塚野委員>

1-3-1「札幌らしい特色ある教育」の中で「雪」・「環境」・「読書」とあるが、「雪」に関する学校活動としては、スキー学習が中心に行われている。先ほどの事務局の説明でもあったが、「雪」に関する活動としては必ずしもスキー授業だけではなく、雪像作りなどもある。文言を直してほしいということではないが、スケート授業に取り組んでいる小学校や中学校もあることを考えると、「雪」に特化するのではなく、冬の札幌の中でどんなスポーツをやらせるのかという意識であれば良いと思う。

#### <事務局（指導担当課長）>

委員がおっしゃるとおりである。「雪」・「環境」・「読書」というテーマを作り上げる議論の中で、様々な意見が出され、象徴的な言葉として「雪」という言葉になった。しかし、札幌の冬、雪がたくさん降る冬、そういった冬を愛して、親しんでいければ、ということが理念にあるため、事業・取組内容の文言をこれから更に検討していく中で、いただいた意見も踏まえて検討していく。

#### <事務局（指導担当係長）>

豊平区の月寒体育館に隣接してできたカーリング場の活用を進めている学校もあれば、藤野のリージュなどスキー以外のウィンタースポーツや、同じスキーでも歩くスキーに熱心に取り組んでいる学校もある。

#### <大久保会長>

議題(1)についての御意見は以上でよろしいか。よろしければ議題(2)の「多様な学びを支える環境の充実」の議論に入りたい。事務局から説明をお願いしたい。

#### **(2) アクションプラン「多様な学びを支える環境の充実」**

#### **(3) アクションプラン「市民ぐるみで支え合う仕組みづくり」**

**資料2**について、事務局から説明を行った。

### <大久保会長>

議題(2)は「環境の充実」についてであるが、「学びの推進」に関する部分についても説明いただいたため、こちらも含めて御意見等あればお願いしたい。

### <梶井副会長>

全国学力・学習状況調査の結果が明日公表されるとのことだった。この結果については、他都市と競う必要はなく、また、北海道の中で札幌市が特別良い結果でなければいけないとも思わない。しかし、子どもたちに確かな学力をつけさせるということは非常に重要なことだと思う。私たちが子どもの頃よりも厳しい、ある意味競争の時代を、もしかするとこれから子どもたちが生き抜いていかなければならないと考えた時に、やはり確実な基礎学力はつけていかなくてはならない。キャリア教育についても、職場体験で、お金を数えて、売れた・売れなかったという検証、確かにこれも大事だが、確かな学力がついた上で行われるべきだと思う。

そう考えると、「自ら学ぶ喜びを実感」するためには、もしくは学ぼうとする力を身に付けるためにはどうすれば良いかという視点が少し弱く感じる。確かな学力をきちんと保証しなければ、安易なキャリア教育ばかり先行し、非常に足元が弱い印象を受けてしまう。

### <林委員>

私も、第3回及び第4回の検討会議で発言させていただいたように、ただいまの梶井副会長の意見と同様のことを強く感じている。修正前の人間像、そしてこのアクションプランの中身を見ても、せっかく育てた「知・徳・体」といった武器をどうやって使うのかということが伝わらない。どういった形でも良いので、是非アクションプランに加えていただきたい。

また、「学力」の定義は何かということに疑問に思っている。文部科学省の定義は曖昧であり、基礎学力を含めている。札幌市の事務局の論点整理の中では、学力は広い概念で捉えているという。「基礎学力の向上」と「広い意味での学ぶ力」の二つは是非区別していただきたい。

### <大久保会長>

基礎学力と言ったときに、何が基礎かということもまた難しい問題だと思う。例えば計算については、計算する方法を教えてもらってそれができればいいということではなく、計算自体の仕組みを理解しておくということも必要になる。どこまでを基礎学力と考えるか。

国は意欲も学力も必要だという捉え方をしているが、札幌市はどう捉えるのか。

### <事務局（指導担当課長）>

私は元々教員であり、小学校の学級担任をやっていた時には、子どもたちに基礎の力をつけさせたい、それが教師として一番の使命だと思ってやっていた。基礎力が大事だということで先生方は一生懸命現場でやっているが、先ほど御意見があったように、見え方の部分では検討する必要があると思う。ただ、事務局としては基礎力という言葉は「学んだ力」という言葉として、言葉は違うものの、基礎的な力もちろん大事だと押さえている。

先ほど梶井副会長のお話でもあったが、職業体験の中、金額の計算という場面でまさに「活用する力」というのが培われる。子どもがそういった活用する場面で「もう少し計算する時間が早かったらいいな。」というような「学ぼうとする力」、そういった力をつけさせてあげたい。それが「活用する力」になる。

また、星野委員に御意見いただいた部分ではあるが、計算や漢字の書き取りなど基礎的なことを一

生懸命やって、それが何に繋がっていくのかということ子どもたちに伝えて分かってもらう、そういったことが大事だと思う。

子どもにとってそれぞれ必要な「学んだ力」、「活用する力」、「学ぼうとする力」の三つ全てをバランスよく育てていきたいというのが我々の真意にある。そういったことで施策の「分かる・できる・楽しい授業の推進」の部分に象徴的に当てはめている。

全国学力・学習状況調査には、A問題・B問題という区分があり、A問題はどちらかと言えば基礎的な力を見る問題、B問題が活用する力を必要とする問題となっている。A問題は、平行四辺形がそのまま出てきて底辺と高さが提示され、面積を求めなさいというような問題。B問題は、道路と土地の地図が示され、そういった地図の見方から畑の面積といったものを求めなさいというような問題。全国学力・学習状況調査も基礎、そして「活用する力」を見るというような作りになっているため、総じて全てを高めていきたいというのが我々の考えである。

### <富田委員>

不登校に関して発言させていただく。現在、高校への全国的な進学率は約98%であり、高校間の学力の差は非常に大きい。どの時点で差がついているのかと言えば、小学校・中学校の段階である。不登校の子どもたちに対して、心のサポーターが支援することは、心の問題には大事なことであるが、不登校でも中学校は卒業できるため、分数の足し算や小数の掛け算・割り算ができないまま高校に進学する子どもたちもいる。高校での学力というのは、ある程度基礎的なものは小学校・中学校の時点で身に付けていることを前提に、思考力・判断力・表現力等の活用する力というものをつかって社会で自立して生きていく力だと思う。しかし、高校段階で進路探究学習をやるが、子どもたちの学力がなかなかついていけないという現状がある。このことは押さえておかなければならない。授業づくりは勿論大事だが、不登校の子どもたちをどうするか、要するに授業に出ていない期間をどうするかということが大事になる。そこの所の考え方をもう少しきちんとしていかなければ、これからの札幌の教育は非常に難しいのではないかと思う。

高校として、数学や英語を中心に来年から学び直しの科目を作る。そういった学び直しの科目をあえて先生方の手で作らなければならない現状があるということは非常に大変なことである。

### <丸谷委員>

委員の皆さんのお話を聞いて、やはり札幌として、家庭教育から始まって高校・大学・専門学校まで行くという連動性の学びがいかに薄いかということが伝わってきた。結局、そうした連携が上手くできていないために、それぞれの期間だけの問題解決で子どもを育てているということ、皆さんの話を聞いて再認識している。高校に入ってからどのように子どもたちの学びの力を推進させるかということは、高校だけで考えて解決することではないし、我々幼稚園だけでも解決することはできない。アクションプランには「幼保小の連携」と書いてあるが、もっと長い目で結びつけるような札幌市の施策が具体的に必要だと思う。子どもたちの学力の低下の話題から、もっと学力を伸ばすにはどうすればいいのかという議論になっていると思うが、幼児教育が教育の出発点であるため、やはり「知・徳・体」を育てる幼稚園としてはしっかり家庭教育と連携をとっていかなければいけない。小学校・中学校・高校と繋げていく時に、繋げる具体的な施策はやはり内容の濃いものが必要である。幼稚園ではいつもも言っているが、遊びを通して豊かな直接体験をたくさんすることが学ぶ力になる。幼児期に学習ドリルをやるのが有効ではないということは、幼児教育に携わっている者は誰でも分かっているはずだが、そういった部分の議論から始めていかなければならないのかと感じた。

### <林委員>

そのあたりでモヤモヤしたところがずっとある。もう少し札幌らしさ、札幌らしい教育ということについて整理できないのかという気はする。

### <竹谷委員>

子どもたちに勉強を教える教育は必要で、その中でも、教える側が楽しい授業展開で教えていくということが重要だと思う。子どもが45分間の授業を苦痛と感じるか、目を爛々とさせて「楽しい、おもしろい、分かった。」というように感じ取れるかどうかも考えていかななくてはならない。

ただ、教育とは何かということ捉えようとするのではなく、もう少し広い意味で子どもたちの幸せを考えていくのであれば、札幌市としてはどのような方向性で行くかということを考えていかななくてはならない。文部科学省の方針にただ乗るのではなく、札幌市独自の教育方針を作り上げていかなければならないと思う。

吉田松陰は塾を開いたときに、学校で授業を行うことは当たり前だが、何のために学ぶのかということをしちんと説いた上で教えていくべきだ、一緒になって勉強していくことでレベルがあがっていく、と言っている。東大の前身の学校の学長も同じようなことを言っており、学ぶということは、楽しいことでなくてはならないと言っている。難しい顔をして言ったところで子どもは顔を見て喜ばないのではないか、教える側も子どもたちと一緒に立場になり、そうした上で「分かったか？どうだ？」と会話をしながらやっていく。そうすれば40分の授業が50分であろうと、「もう終わりかい？」という形になるのではないか、というようなことを説いている。これは難しいことだと思うが、一般的に考えてそういうことから取り組んだ方が子どもたちの良い面を引き出せるのではないかと。そして、一番大事なことは、その子どもたちが社会に出たときのことである。私の知る限り、子ども時代は勉強ができなくて、どうにもならなかった、そういった人でも社会に出て成長して素晴らしい会社を営んでいる人や、事業展開を行っている人が多くいる。そういったことを頭に入れながら考えていただければ、と思う。

### <飯田委員>

冒頭に説明いただいた「人間像」の修正案について、これはこれでもれなくまとまっており、アクションプランにも反映されていると思うが、先ほどの梶井副会長の御意見は、今まさに議論されていることは、その手前に幹となるものが必要なのではないかということかと思う。全般的なこと全てに通じているものが基礎学力であると思うので、先ほど林委員がモヤモヤしたところがあるといっていた部分も、この部分かと思う。そこのところをもう少し押さえた上で先へ進んだ方がモヤモヤせずに進めるのかなと思う。丸谷委員がおっしゃったのも同じことで、連携をしていくというのは当然必要だが、ただ連携するだけでは済まされず、広範にわたる全てを貫いているものが何なのかを確認し、その上で進んでいく必要がある、ということかと思う。

### <梶井副会長>

ただいまの飯田委員の意見は、「自立した札幌人」という大きな括りをもう一度振り返ってみる、自立するために何が必要かということを考えてみる、という話かと思う。私は、若者自立支援の活動センターの設立の際に関わったが、札幌市の中で、驚くほどの人数が学校にも行っていないし、就業もしていないという状況があった。結局そこからは安定した就業に結びつかず、彼らが40～50代になったときに、公的援助を受ける層となる。それを遡れば、先ほどから皆さんの言っているように、小学校・中学校は不登校の子どもや学力が足りていない子どもでも留年がないために卒業できる、高校に



も入れるという現状がある。下手すれば大学生にもなれる。しかし、就業には繋がらず、基礎的な学力もない。そういった層の人々への対応策を考えないままでは、こうした人々は増えていく一方ではないか。

本来の意味での「自立した札幌人」を育てるためには、自立できる教育がどのようなものなのかということ、考える必要がある。

#### <富田委員>

資料3の4ページ目について、「多様な学びを支える環境の充実」の中でも2-5「学びのセーフティネットの充実」は非常にボリュームがある。大通高校の支援については非常にありがたいが、結局、この「学びのセーフティネットの充実」というのは対症療法である。子どもたちをどのように支援していくのかということはたくさん書かれているが、学習面について書かれている項目は非常に少ない。学びのセーフティネットの充実を目標にするのではなく、子どもたちがセーフティネットを必要としないように育てていくということがこれからの札幌市の考え方として必要なのではないかと。

#### <河野委員>

ただいまの話に関連して、先日引きこもりの青年と話す機会があったが、その青年がなぜ引きこもったのかという理由として、「自分自身がこれ以上できないと感じたときに引きこもらざるを得なかった」という言い方をしていた。先ほどから、「自立した札幌人」についての話が出ている中で、「自立」というのは非常に大事なキーワードだと思っているが、今若者たちに「自立」が何かという事を問うと、多くの若者は「収入を得て、他人を頼らないで生きていくこと」だと答えると思う。もちろん親たちもそのことを望んでいると思うが、引きこもりの青年は、実際にお金を儲けるといふところまで到達できないということを感じてしまい、先へ進めなくなったと言っていた。その状況をどう打開していけばいいかということも見えずに過ごしてきたと、40歳に近い若者が言っていた。

私は、中学校と地域の人達と一緒に、出産も含めた子育て体験をするという取組を毎年行っているが、この取組がなかなか中学校の現場、高校の現場に広がっていかない。働きかけはしているが、なかなか実際に取り組む学校が増えない。その理由の一つには、総合的な学習の時間など様々な取組により、地域に開かれた学校づくりを進めてきたが、何処かでストッパーがあり、現実的にはなかなか地域に対して学校が開かれていかないということがある。そう考えると、資料3の後半に書かれている、地域や家庭との連携ということが札幌市の中でなかなか進展していないのではないかと。学校は学校、地域は地域、そして家庭は家庭という括りがいつの間にか札幌市の中で固定化してしまっている、ということを実践の中で感じることが多い。このことについて、「共に」というキーワードをもとにどう作っていけるかということが今求められてきていると思う。あるひろば型の子育て支援センターには、適応指導教室やフリースクールなどに行くことのできない不登校の子どもたちが来ている。そこで、乳幼児を抱えた母親や、そこに来ている高齢者や障がいのある人たちと一緒に、不登校の自分自身を振り返る機会を与えられている。2～3日前にもそういった実践報告が広場の親たちからあった。そういったことを考えると、やはり札幌の中に、単なる連携ではなく、「共に生きる」というような、教育の現場と地域が結びついていくような考え方が非常に大事なのではないかと。

#### <大久保会長>

議題(3)にも関連した意見が出ているため、ここからは議題(3)も含めた議論を行っていただきたい。

### <星野委員>

先ほど梶井副会長から、基礎がないうちに応用をやっても効果がないという意味合いのお話があったが、これについては、「勉強に対する動機付け」という言葉がキーワードになると思う。基礎がなければ応用をやっても仕方ないだろうという考え方はあると思うが、応用をやってみて、例えば職業体験で実践をする中で、自分の力の無さを実感し「あっ、やんなきゃ！」と気づくことも大いにあると思う。恐らく小学生ぐらいまでであれば、「楽しい授業」で学ぶことができるかもしれないが、中学生になると精神的にも成長し、楽しいだけでは通用しなくなる部分があると思う。そのため、地域と学校の繋がりがなかなか難しいという話もあったが、やはり生徒たちが学校という箱の中に閉じ込められた状態だからこそ、生活の範囲が狭くなり、世界が見えなくなり、実際に自分が働けるかどうか自信がなくなってしまってリタイヤしてしまう人や、自分の場所は学校にしかないと思っていたのに、いじめられてどこにも逃げる場所がなくなってしまう子どもがいる。こういったことは生徒の動機付けの機会を失うだけではなく、自分の居場所が学校にしかないという実感から、不登校などにも繋がってくると思う。

そういった考えから、学校はもっと開かれていくべきだと思う。地域としても行政としても学校としても、開かれていくべきだという考えはあると思うが、現状として開かれてないということは、先ほどもお話があったように、やはりなかなか実現が難しいことなのか。

### <塚野委員>

ただいまの御意見の答えになるかは分からないが、現在私の学校には4名の教育実習生が実習にきている。恐らくこの4人が教員になった時に、教員になろうと思った理由を聞くと、皆が小学校、中学校もしくは高校時代に素晴らしい先生に出会ったから、と答えると思う。子どもというのは、様々な体験の中から、自分のなりたい職業を見つけていくもの。今はなかなか様々な職業を実感できる機会が少ない。前回の検討会議でも話したが、私の学校では2日間にわたって職業体験を行っている。そのため、1日行って興味を持った職業に、2日目で自主的に取り組むことができる。ただ与えられたものを経験しても子どもたちは自立していかないため、やはり意欲が必要だと思う。先ほど言ったように、教員になりたいという子どもは、自分が教員になりたいと思ったから一生懸命勉強して教員になろうとしているし、プロ野球選手になりたいという子どもも、憧れを持ってその職業に就くために自分がどう努力していくかということが大事である。

学校はミニ社会、社会を感じさせる疑似体験の場だと思うので、学校のそういった部分をしっかり生かせればいいのではないかと思う。私の学校ではスノーフェスタと言って小さい子どもたちと遊ぶ機会を設けている。その時に子どもが好きだなと思うと、幼稚園や保育園の先生を目指すきっかけになるかもしれないし、その後の勉強の仕方も変わってくると思う。学校としてはそうした子どもたちの意欲を育てるようなことに力を入れたい。そういう意味での社会との繋がりを子どもたちが持てるようにしてあげたいと思う。

### <星野委員>

塚野委員の学校では積極的にそういった取組を行っているとのことだが、積極的でない学校もあると思う。積極的でない学校にも取組を行わせるためには、やはり行政が何かしなければならぬのではないか。

### <塚野委員>

そうだと思う。例えば、「赤ちゃん抱っこ体験」というような取組がある学校がやると、その情報が

入ってきた学校でもやり始める、という動きは実際にある。先ほどスケート授業の話の流れで、他にも色々な冬のスポーツをやっているところがあるという情報が出てきた。そういった面では、行政から様々な情報を発信してもらおうということは非常に重要だと感じる。

### <秋山委員>

中学校では実際にそうやって学校間が繋がってきているように思う。また、小学校でも色々な機会を作っている。私の学校でも数年前、学校の中にスケート場を作ったことがある。

子どもに将来どういうことを目指していくかということを感じさせる、ということについては、以前の小学校教育と比べると非常に意識が高まっていると思う。計画の中に「進路探究学習」という項目が挙げられたこと自体が大事だと感じるし、今後ますますその取組は強まっていき、子どもにも多くの機会が与えられていくのではないかなと思う。

また、地域との関わり合いについては、学校が一方的に期待をするのでは長続きはしないと思う。地域や家庭の方から学校のために何かを働きかけることに、メリットや喜び、やりがいがあるという関係をお互いに作っていかねばならない。保護者の方々や地域の方々が学校のために何かをするばかりでは、なかなか上手くいかないと思う。

### <事務局（指導担当課長）>

ただいま委員の皆様からお話があった地域との繋がりについては、総合的な学習の時間が始まって約10年経った現在、これが導入される前とは大きく変わったという印象がある。総合的な学習の時間で地域の方にゲストティーチャーとして来ていただいたり、地域に出かけて行って自分たちの校区のある道路の交通量調べをしたり、そういった活動の中で地域との繋がりがある。

また、行政からの情報提供ということについては、教育委員会のホームページで各学校での取組や実践について紹介させていただいたり、各学校のホームページにも活動について載せていただいているので、そういった所を御覧いただければと思う。

それから「雪」・「環境」・「読書」という札幌らしい特色ある教育について、「環境」の部分では、先ほどお話ししたように、身近な地域・環境との繋がりがある。「雪」の部分は、子どもたちが雪まつり会場に出かけて行って、観光客の方のガイドを引き受けてご案内するといった活動や、中学校では「除雪ボランティア」として地域の除雪に困っている方のお宅に伺って除雪をするという活動を行っているところもある。

最後に、校区内の幼稚園・保育園・小学校の校長先生・教頭先生・園長先生が集まって打合せをするという「幼保小連携協議会」というものがあり、私も今年西区の協議会に参加した。その会議で、保育園や幼稚園の園長先生方から、「以前から小学校と交流している園はあるが、なかなか敷居が高い」という話があった。ただ、その会議が設定されたということで「今度は連絡してよろしいんですね」、「いつでもどうぞ」という繋がりができ、そういう意味では大きな一歩だったと思う。

### <稲邊委員>

地域と学校と家庭という三者の関係は、本当に子どもの健やかな成長には欠かせないものだと思う。きちんとした基盤で連携することは、とても大事なことだと思う。

施策の中には言葉として入れられていないが、コミュニティスクールという取組がある。コミュニティスクールとは保護者と住民が学校の運営に直接参加できるので、教育課程の編成や、学校の運営に直接住民の声や保護者の声が反映される。札幌市はこの取組を意識しているか。コミュニティスクールのように学校が取り組んでいる事例はあるか。

### <富田委員>

私の学校が、文部科学省のコミュニティスクール研究事業の委託事業をやっており、現在2年目となる。私の学校は、社会に近い学校ということでこれまで取り組んでいるので、学校の中に社会人がたくさんおり、人生を考えるための話をしてもらうこともある。委託事業は2年目に入ったが、運営委員会では、こういった事業を継続的に行う仕組みがないだろうかという意見はまだ上がってきていない。しかし、大学の先生、我々教員、教育委員会で集まりをもち、大通高校を支援し、なおかつ結果を研究していきたい。来年以降のことは私の判断だけではどうしようもないが、今の札幌市の現状を考えると、一つの成果としては良い結果を残していると思う。

### <稲邊委員>

住民や保護者の声が学校の運営に反映されるということは、その方々が教育者としての意識を持つということだと思う。私たちがこの学校を作りたい、こういう学校にしたい、という思いが強く根づくと思う。そうなった場合、地域の方も保護者の方もどんどん学校に足を運ぶようになり、三者で色々な情報交換をするということに繋がっていくのではないかと。実際に富田委員がおっしゃったように、そういった取組がなされているということなので、幼稚園は様々な地域から子どもが集まっているので難しいかもしれないが、学区がある小学校・中学校に関してはもっとそうした制度を取り入れてはいかがか。そうすることで全体の連携が進んでいくのではないかとと思う。

### <富田委員>

コミュニティスクールは、学校の経営者を承認し、教員人事権も持つ組織であるため、かなり難しい面も出てくる。

### <事務局（生涯学習推進課長）>

生涯学習推進課では学校と地域の連携事業をいくつか実施している。その中で、ただいま稲邊委員がおっしゃったものと近い事業として「学校・地域連携事業」があり、教育委員会から委託費を支払い、学校と地域が連携して学校行事を始めとした地域行事等を行うものである。約60校の取組で、平成11年から継続し行っている事業である。その中で、地域と学校を繋ぐコーディネーター役が必要であるということが、課題としてあがってきている。

文部科学省が奨励している事業としてコミュニティスクール、そして学校支援地域本部事業というものがある。コミュニティスクールは富田委員からお話があったように、学校の人事権も含めた、法的組織としての位置づけにある。学校支援地域本部事業は、仕組みとしてはコミュニティスクールに発展していけるような組織として、文部科学省も将来的には全国へ広めたいということで進めている事業である。札幌市も平成21～22年度に北栄中学校で、国の補助を受け学校支援地域本部事業を行った実績がある。学校と地域等の連携という先ほどの話に立ち返れば、やはり地域と学校をつなぐ何かしらの仕組みが必要であると考えている。

### <事務局（指導担当課長）>

補足として、ただいま説明したものに加えて学校評議員制度というものがある。地域の方に学校評議員をお願いし、学校に来て子どもたちの様子を見ていただいた上で御意見をいただき、学校評価の中でその御意見を生かしていくといった制度である。この制度は10年近く継続している。

また、地域公開日という、保護者以外の地域の方に子どもたちの様子を見ていただくことができる、という日を設けている学校が多数ある。

### <稲邊委員>

これまでの話を聞いていると、実際に行われている取組はあるが、現場の実感としては、連携されていない、分断されているという意識がある、ということかと思う。この部分をどうやって連携しようという意識に変えていくかということが重要だと思う。

コーディネーターのなり手がいないということも確かに大きな課題であるが、具体的にコーディネーターを誰かに要請する動きまで至っていないのであれば、その具体的な取組に一步踏み出さなければ、連携がなされていないという意識は変わらないような気がする。この課題をもう少し掘り下げて分析していただければと思う。

### <飯田委員>

私は札幌市PTA協議会から来ているが、会員が13万人おり、私たちのところに保護者からの様々な要望や意見が集まってくる。今一番多いのは、ただいまお話しされていたように、どうして連携が取れているように見えないのかということである。これについては、ある意味では意識の問題だと思う。

例えば、今の子どもをどう育てるべきか、ということは非常に大切なことだが、今我々が一番のテーマとして持っているのは、親をどう育てるかということ。その親というの、今の親ではもう遅いため、今の子どもが親になる過程をどうやって育てていくのか、社会人をどう育てていくのかということ。その点について意識をしていくということが、私がこの10年間の新たな「札幌市教育振興基本計画」で非常に興味を持っている点である。それは先ほどの基礎学力の話にも繋がる部分であり、我々は、子どもがまともに教育を受けることができない、勉強する環境にないという家庭が非常に多くなってきているという実感を持っている。また、先ほど星野委員がおっしゃった、応用を学べばまた基礎に戻る必要がある、ということは確かにあるが、問題点はもう少し下の部分だと思っている。読み書きそろばんができないという段階からは絶対に応用という意識にはいかない。そのため、先ほどから御意見があるように、このアクションプランの中で、根幹を貫く基礎的なものはどうしても必要だと思っている。

今はセーフティネットというところでは済まされない問題がある。セーフティネットは、昔はごく一部の人たちが利用するものだったが、今は利用する層が非常に分厚くなっている。先ほど梶井副会長もおっしゃっていたが、私も親としてそのような実感を持っている。そういう意味でも、アクションプランの中で基本的な、基礎的なものを貫いていくということはどうしても必要だし、それが一つの施策に盛り込まれていくということを期待している。

### <富田委員>

今のお話に関わって、実は、親が大変な状況になっており、子どもがしっかりしているというような、子どもが親の面倒を見ているという状況がある。それにより、子どもが大変な状況になっている。そういった状況がある中で、一人の子どもを幼稚園から高校までの間、特別支援学校も含めて、どのように育てるのかという内容が欲しいし、資料3の4ページにある「地域と学校の連携」と「家庭の教育力の向上」は仕組みという位置づけになっているが、この仕組みと学校の先生方の教育を合体する構想をもっとしっかり作って欲しいと思う。

### <林委員>

様々な意見が出ており、幹の話から枝と葉の話に入ってきたところである。この検討会議は本日で5回目であるが、やはり私自身モヤモヤしている。アクションプランを見ていると、葉の方の話ばかり

りに進んでしまうが、梶井副会長や飯田委員の話を聞いていても、結局「自立した札幌人」というところに議論が戻ってしまう。最初は私も「自立した札幌人」については、これから大きく発展する札幌でレベルの高い人を育てていく、それが「自立」ということだと思っていた。しかし、これまでの検討会議で皆さんのお話を聞いていると、そうではない。基礎学力のない子どもたちでも、幼稚園はまた別の話かもしれないが、小学校から大学までチェックなしに卒業できてしまう。そして結局は社会人になって自立できない人が多くいるという話を聞くと、根本的に教育として必要なのは、いかに自立できない人を少なくするかということ、そして不幸にして自立できない人をどれだけ地域社会でサポートするかということの二つではないか。

知徳体のバランスのとれた人、というのは非常に曖昧な表現で、結局セーフティネットを必要とする人がどんどん増えていくのではないかと、そういった疑問がどうしてもある。これから教育を進める中で、そういった人たちを、例えば今1万人いるとして、10年後には5千人にする、といったような明確な目標が欲しい。もう一つの自立できない人をどうやってサポートするかということについても、非常に弱いような気がする。

「自立した札幌人」の「自立」というのは、自立していない人が非常に多いので、少なくとも平均的に自立した人を多くしよう、ということに光を当てるべきではないかという気がする。

#### <長沼委員>

私も林委員の意見に同感である。アクションプランのほか、最初の目指す人間像等々についても、大変文章はまとまっており非常に耳当たりの良い文章だが、どうも特徴がないというか、面白くないというか、夢がないというか、ただただ綺麗に書いているような気がする。今後10年間の計画として考えるのであれば、やはりもう少し明確な特徴を持った、もっと具体的な夢のある理想を書けば良いのではないかと気がする。しかし、総花的にならざるを得ない部分も分かるので、強弱を付けていくことが必要なのではないかと思う。

先ほど基礎学力の話が出ていたが、これについても全く同感であり、私は小学校教育が非常に大事だろうと思う。1クラスの子どもを先生一人で担任していると思うが、個人の学力差が大きいのは現実だと思うので、1クラスの人数をもう少し少人数に分けるだとか、基礎学力をつけるにはもう少し機密なきめ細かい教育をする必要があると思う。そしてその上で個性を尊重するような教育を行い、札幌の独自性が確立されれば、「札幌すごいな」と言われることが出てくるのではないかと。

先ほども言ったが、アクションプランに強弱をつけ、これが札幌的だ、というような、ここを目指す、というようなものが見えるアクションプランでも良いのではないかと。そのためには、林委員もおっしゃっていたが、セーフティネットを必要とする子どもを作らないというような目標を具体的にアクションプランに落とし込んでいくことが必要ではないか。予算がない等、できない理由はいくらでも挙がると思うので、どうすれば教師を増やせるか考えたり、本当に優秀で情熱のある人が教員になりたいような社会の仕組みを当然作ったりするべきだと思うし、それが札幌の独自性を持つものであれば、札幌は素晴らしい街になると思う。

#### <丸谷委員>

長沼委員がおっしゃったとおり、幼稚園も人が足りない。人を増やしたいと思っても、学校と違って全て国費で賄っているわけではないので、難しいものがある。そういったことも含めて、基礎学力を作るならば大事にしなければならないのは幼児教育である。基礎学力はいきなりつくものではなく、幼児期の健やかな生活体験が必要である。幼稚園は毎日が職業体験の宝庫であり、幼児は直接体験で遊びを通して学んでいる。小学校では様々な学習スタイルを様々な形で努力している。「自立した札幌

人」を育てたいのであれば、そういった努力していることを札幌市が施策として行うべきだと思う。また、検討していただけるということではあったが、札幌市立幼稚園は研究実践園になっているので、そこをもっと生かして、幼児教育に投資をしていただきたい。幼児教育を施策として入れていただいて、予算をつけていただいて、子どもたちが今まで以上に多様な体験をできるような、興味・関心が生まれるような環境づくりを行っていただきたい。その次の段階で、基礎学力をつけるという段階に話が進むと思う。幼児教育は市立幼稚園がそういった形で施策を行えば、私立幼稚園も一緒になっていけると思う。よろしくお願ひしたい。

### <三宅委員>

丸谷委員に意見を言っただき、ありがたく思っている。

現在、市立幼稚園が各区1園になり、幼保小で連携していこうという話になっている。また、幼稚園は子どもが小さい分、地域との関わりがやり易い部分がある。スクールガードの方と毎日握手して登園する、地域でフラダンスをしている方々が幼稚園の誕生会に来てくださる、自宅で育てた花を週に一度持って来てくれる方がいる、絵本の読み聞かせのボランティアをしていただく、といった様々な面で地域との関わりを持っている。また、小学校とも、共に子どもを育てていこうということで繋がりがやすいという部分もある。こういった実際の繋がりを一生懸命やっけていながら、地域や小学校とともに子どもたちを育てて行こうという動きがある。

### <秋山委員>

非常に大まかな話になってしまうかもしれないが、アクションプランが視野に入れている子どもたちというのは、恐らく努力をすれば伸びていく可能性がある子どもたちである。これからは、どんなに頑張っても分からないという子どもたちと、頑張らなくてもできてしまうという子どもたち、その両端をどう底上げしていくかということをもっと細やかな施策や方針に、考え方も含めて盛り込んでいければ、札幌としてどのようなことをやっているのか、ということが少し見えてくるような気がする。アクションプランには、「充実」や「図る」といった言葉が多く書かれている。勿論これから更に質を高めていくということだとは思いますが、実際に中身を見てみると、これまでやってきた、現在やっていることが多い。例えば、私が何年か前にアメリカへ行った時に「No child left behind.」という施策があった。一人の生徒も取りこぼさないという意味である。この施策には課題も少なくなかったが、こういった大きな目標が掲げられていた。札幌市としても、非常に大きな、もっと力強いセリフとして、もっと強いメッセージが出てきても良いのではないかと思う。

### <竹谷委員>

私は地域で様々なことをやっており、駅界隈から公園とあちらこちらをパトロールした際に、中学生がたむろしていることが多い。小学生や高校生はたまにいる。各区に少年相談室というものがあり、色々な話を聞くが、授業が面白くない、授業についていけないと言う子どもが圧倒的に多い。そういったことを考えた時、最終的に素晴らしい札幌人を形成するためにこういった形で持っていくのか。

家庭教育について、地域も含めて色々なところで言われるが、これは地域と学校と家庭が三位一体でやらなければ絶対に成功しない。長続きしない。

家庭教育の件に関連して、親の話をすれば、今、PTAの今役員のなり手がいない。私は入学式にもたまに顔を出している。入学式後、各クラスに新入生の親たちが集まるが、大半が帰る。知人に、なぜ帰るのか聞いたところ、「役員を押し付けられるから嫌だ」と言う。こういった面から教育を変えていかなければならない。二言目には「働いているから」と言っており、ついついそれが逃げ場にな

っているのかもしれないが、このことについての対応も課題だと考えている。

また、先ほどコミュニティスクールの話が出たが、私もこれは面白いスタイルだということで地域の方と話をした。自分たちで組織を作って、時には夜授業が分からない子どもたちを集めて夜学の塾のようなものを無料でやる、そんなことや色々な遊びなどをやって動いて行こうという話になっている。大変なことだとは思いますが、時間をかけながら形を発展させていけば段々と大きくなるかなと思っている。このことについて、市教委の方でも研究していただいて、学校でそのようなことをやってもらえればと考えている。

学校・地域連携事業について、私も小学校でその役員を命じられ、4年間務めた。予算は4年間で25万円であり、「こんなに少なくはとてできない」と言いながらも4年間なんとか地域と合体して頑張った。市教委としても連携にもう少し力を入れて、地域と親も入れた三位一体の取組を考え、予算をつけた上で、地域との和合・混合ということでやっていけば結構な事業展開ができるのではないか。私は、ある小学校で子どもと共に、総合的な学習の時間を使って地域の安全マップを作り、犯罪者から子どもを守ろうという取組を行っており、そろそろ5年目になる。様々な話を聞いて、今度は安全ばかりではなく、地域を探検し、地域の良いところと悪いところを地図に落とし、今後の教育の中に生かしていく、こんなこともこれから考えなければいけないと思う。

学校現場でも色々な問題が出ている。刃物を持ち出している子どももいる。地域で見ている取り上げた子どももいる。昔は服装検査があり、そういうものを持っていれば鞆の中身まで全て確認されたが、今そんなことすればプライバシーの侵害だと言って親が大変な勢いで怒ってくるため、やっていない。こういったことも考えた上で、自立した札幌人というものを作り上げていただきたい。幼稚園も保育園も小学校も中学校も高校も特別支援も関係なく一貫してそういったことに取り組んでいただきたい。

#### <塚野委員>

地域の連携について、中学校の地域連携の一つとして中学校区青少年健全育成推進会というものがある。学区によっても違うのかもしれないが、構成メンバーは学校、PTAの役員、それから学校評議員、これは町内会の役員の方が多く入っている。それから民生委員の方、そして小学校の先生方にも来ていただいている。地域の中でその中学校をどうするかと考える意味では非常に良い会議だと思っている。この会議の中から我々は、自身の学校での課題や、地域の方々が感じていることを受け取っている。

困り感を持っている子どもたちへの対応について、学びのサポーターや特別支援教育巡回相談員というものがある。困っている子どもというのは、困り感が本当に一人一人違う。そのため、一人一人について個別の対応をしていかなければならない。先日、特別支援教育巡回相談員の方が来て研修会を行った。特別支援教育巡回相談員の方に実際に授業を見ていただいて、子どもたち一人一人の困り感についてお話いただいて、どのように指導すると子どもたちは授業に集中できるようになるかということ聞いた。授業についていけない子どもを作らないためには、その子どもがどういうことで困っているのかを我々教員が知り、どう適切に対応していくかということである。校長会としても、学びのサポーター制度、特別支援教育巡回相談員、特別支援学級との交流も含め、もっと特別支援のことに理解を深めるとともに、特別な支援を必要とする子どもたちを支えていきたいと考えている。

しかし、最後はやはり夢のある教育、長沼委員が言っていたような「札幌って良いよな」「札幌はこんな教育をしているのか」という話をしていただけるような教育を考えていきたい。



### <大久保会長>

私も教員を輩出している大学にいますので、教員としての能力・力量のある先生方を輩出しなければならぬと思っています。私は、授業でも、先生方が子どもに感動を与えることが必要だと思う。ただ当たり前前に公式を教えるのでは子どもは感動しない。どうしてこの公式で答えが求められるのかということ教える先生であれば感動する。また、今文部科学省が言っている、学び続けるということも重要である。先生になったから終わりというのではなく、今の子どもたちの状況はどうか、そういった意識を持てるような教育を育てていくということが重要。

基礎学力を大事にしていくということについても、教員は非常に大きな役割を持っているので、教育の方針として教員の資質向上に関する施策をどのように立てるのかということも考えていかなくてはならないと思う。

### <梶井副会長>

「市民ぐるみで支え合う仕組みづくり」の重要性については竹谷委員をはじめ委員の皆様に様々お話いただいたところであるが、この「市民ぐるみで支え合う仕組みづくり」は、「自ら学び、共に生きる力を培う学びの推進」それから「多様な学びを支える環境の充実」とは、異質な部分だと思う。他の部分とどのように体系化できるか、根幹を貫くものが必要だという話が出ていたが、他の部分にどのように貢献するのはまだ見えていない。文言を見ても、今まで行ってきたことばかりで画期的なことがない。ただ「家庭の教育力の向上」と言っても、絵に描いた餅である。その段階を乗り越えて、何ができるのかということでもう一步踏み込まなければ、ここの「市民ぐるみで支え合う仕組みづくり」は他に比べて弱いし、ありふれているという印象を受ける。ただ、もう議論が煮詰まっているので、少し時間を置いて、どこに何を落とし込むのかということ、これまでの意見をもとにまとめていかなければならないと思う。

### <永根委員>

「教職員の資質・能力」という部分に異校種に関することが書かれているが、校種概念というのは、幼稚園・小学校・中学校・高校の4つの校種に特別支援学校も加わったものだと思う。特別支援学校が校種に加わって初めて、障がいのある子どもと障がいのない子どもがいるということが認識され、子どもの育ちを連続で捉える視点が育つのではないか。そうすれば、先ほど御意見があったそれぞれの子どもの困り感にも気がつけるのではないか。

校種という分け方に特別支援学校を含めていただき、幼稚園・小学校・中学校・高校という分け方を広げていただきたい。このことにこだわる理由は、我々の学校は子どもに保護者が付き添って通う学校で、登校から下校まで保護者が待機している、そう聞くと、他の学校より家庭との連携を持っているのではないかと思われるかもしれないが、保護者から様々なニーズがあり、学校に任される形になっている。家庭との連携はなかなか難しいが効果的な取組を進めている。特別支援学校で何か手立てを講じる際には、担任レベルから主治医・事業所等関係機関との相談が必要になることもあり積極的に取り組んでいる。また、札幌市には地域学習校というシステムがあり、特別支援学校に通う子どもが、居住地が校区の小学校や中学校に通うという制度がある。そうすると、特別支援学校の担任が、本来の校区の学校へ行ってその担任の先生とミーティングすることになる。これは、特別支援学校のことを他の学校の先生方に知っていただくことにも繋がる。

こういった特別支援学校の多様な取組を生かしていく、学校間連携、異校種間連携がなければ、教育は進んでいかぬと思う。是非この点について整理していただきたい。

### <大久保会長>

他いかがか。

### <星野委員>

具体的で細かいことになるが、3-2-1 のところに「子どもの読書環境の充実」とあり、「絵本作り、出版体験」とあるが、あまり読書が好きではないという立場から言わせていただくと、読書に親しむという観点からは絵本作りや出版体験には繋がらなかった。これは、本という媒体には親しめると思うが、中身には親しまないだろうと思うので、何か別の取組が今後できれば良いなと感じた。例えば、今札幌でもやっているところがあるが、中高生であれば、ビブリオバトルという、二人が互いに自分の読んだ本がいかに面白いかということ売り込み合うという取組がある。そうした取組であれば中高生でも取り組めるだろうし、は物事を人に伝える訓練にもなるため、このような新しい取組も施策に入れていただければと思う。

### <事務局（中央図書館調整担当課長）>

本を読むことも大事だと思うが、自ら本を作ることで、自分たちで取材し、自分の考えを本にまとめていく、そしてそれをどれだけ多くの人に読んでもらえるかということで、販売の体験も行っている。これは市内の出版社の方に御協力をいただき、一種の職業体験にもなっている。ただ、ただいま御意見いただいたように、他にも様々な読書を通じての学習があるかと思うので、今後研究していきたい。

### <事務局（指導担当係長）>

補足として、中央図書館で毎年10月に「さっぽろ家庭読書フォーラム」というイベントをここ何年間かやってきている。その中で、中高生の図書委員会・図書館が活動を発表するというイベントを行っている。ビブリオバトルとは違うが、様々な学校の図書館が本を紹介し合うといった取組も始めているので、ただいまの御意見を参考にしていきたい。

### <秋山委員>

取組内容に関して、2-1-5「緊急対応への体制の充実」に「緊急配信メールのシステム整備」と挙げられている。不審者情報や災害情報などの緊急情報を学校からリアルタイムで配信するというのは分かるが、これはアドレスの管理などリスクも多くあるのではないか。ここに書いてある表現では、「各学校判断のもと」というところが引っかかる。札幌市として「効果的な運用を図る」とあるが、実施する学校としない学校が生じた場合、札幌市はどういった関わり方をしていくのか。アドレスの管理は非常に大変で、万が一外に出てしまうということを考えると、非常に大きなリスクがある。ある担当者に聞くと、学校でアドレス管理を行うと非常に多くの時間をかけて管理しなければいけないという。これについては、どう考えているか。

### <事務局（調整担当係長）>

これについては、校務支援システムで各学校の校務を軽減するためのシステムを導入したが、その一つとして、緊急配信メールを配信する機能が新たに搭載された。どの学校でもこの仕組みが使える状況になったため、計画に載せたもの。そのため、システムを使うかどうかは各学校の判断にお任せしている。例えば、現在FAXで行われている学校があれば、今後もFAXを使うのかシステムを使うのかは判断を任せるといような形である。システムは業者で一括管理をしているため、空メール

を送信すれば登録となる。どうしても保護者が学校の先生にはメールアドレスを教えたくないといったこともあるかと思うので、そういった心理的な壁を軽減するためにシステムの構築に至った。

#### <秋山委員>

非常に良く分かるが、あえてこの項目をこれからのものとして計画に載せる必要はないような気がする。「学校の判断のもと」であればこのシステムのメリットは私も非常に良く分かる。ただ、教育委員会が効果的な運用を図るとすれば、積極的に呼びかけるということにもなるわけで、学校によって使わないところがあるのであればあまり効果はない。どうも他の施策・取組内容と質が違う気がしたので、もしこのシステムの良さを謳うのであればもっと違う内容を入れた方が良いのではないかと少し気になったところ。

#### <大久保会長>

事務局には今後検討していただくということをお願いしたい。最後に何かある方はいるか。

#### <室橋委員>

読み・書き・算数について、算数は非常に時間がかかるものであり、このところをしっかり時間をかけなくてはならない。このところを小学校低学年でやれないまま、先に進まなければならないという現実がある。読書活動は非常に大事だと思うが、算数を丁寧にやるということを考えなければ、ただみんな一緒にやっているというだけなかなか先へ進まないところがある。結果、読み・書き・算数は家庭でやるということになれば、親が困ってしまう。その部分について、札幌の場合はどうなのかということを見据える必要がある。

また、総合的な学習の時間に関する話があったが、これはなかなか基礎学力に繋がらないということで、その時間が無くなるという話で、時間数は減ってきていると思うが、私はとても大事なことで有効に使うべきだと思っている。

#### <事務局（指導担当課長）>

ただいまの御意見に関わって、最後に情報提供も含めてお話をさせていただく。ただいま室橋委員がおっしゃったことは、非常に大事な観点だと思う。冒頭「学ぶ力」についての話の中でお話ししたが、我々としては基本的に学校・学習・授業の中で子どもたちに基礎力をつけていきたいと思っているが、家庭にもお願いをして連携をしなければいけないと思っている。

今の札幌の子どもたちの平均的な状況をお伝えすると、全国学力・学習状況調査の全国的な結果が明日公表されるが、これまでの札幌市の子どもたちの状況としては、中学校については概ね全国の平均を上回っている状況にある。小学校については全国の平均と概ね同程度という状況にある。その中で、我々が今の札幌の子どもたちの課題として押さえているのが、「活用する力」。思考力・判断力・表現力に課題があると捉えている。その課題をどうするのか、基礎的な力をこれからも継続してつけていくためにはどうするのか、そして、意欲を高める、何のために勉強するのかということはどうやって伝えていくのか、自己肯定感を高めるにはどうすればいいのかということが目標となる。そのため、幼児教育の部分で言えば判断力・表現力というのは人間関係にあたり、日常の活動の中で先生方や園長先生にはお話をさせていただいているところである。

#### <大久保会長>

それでは本日はこれで閉会としたい。ありがとうございました。

### 3 閉 会

次回の日程等について、事務局から事務連絡。

以上